

船に乗ることができた。輸送船の船底に押し込められ、やっと一息ついていると、間もなく周囲がざわめきだした。「民主委員は船底に集まれ」。敵しい声、声が広がっていく。

このごろから船酔いが出かける。高い梯子を上って甲板に出ると、船はゆれ、便所に行くまでに海に何回か飛び込みそうになった。さらに船酔いは強くなって、とうとうデッキにしがみついたの船旅となった。船底での騒ぎは一晚中続いたと聞いた。

シベリア抑留記

和歌山県 中松 利男

抑留前の記

終戦の確認

昭和二十年八月八日、日ソ開戦以来、急遽部隊は、平陽から牡丹江に移動した。ここにおいて、連日連夜、挺身作戦に終始し、壮絶な戦闘が繰り広げられた。

八月十四日、十六時を期して、全軍挺身切り込みの軍命令が下達された。しかし十五時三十分ころになって、横道河子への転進に命令が変更された。

昭和二十年八月十八日午前二時ころ、終戦から三日後になってようやく終戦に関する命令を受領し、終戦が確認された。数日間の武装解除を経て、ソ連側の警護のもとに牡丹江附近の収容所に護送集結された。

作業隊の編成

我々は名簿の上で、将官級、左尉官級、下士官兵に区分され、将官級はいち早くハバロフスクへ空路護送された。

つづいてソ連側は、作業隊の編成にとりかかった。将校一人を長とし、下士官、兵を合わせて千人を単位に隊を編成し、シベリア各地に送られて強制労働を科せられた。将校連中は、将校収容所に一括収容する目的で、千人単位に隊を編成され、将校収容所に送られたのである。ここに収容された我々は、作業の内容によって必要人員を作業隊として編成され、強制労働を科せられたのであった。

作業隊編成にあたってソ連側は、編成は帰国のためのものであって、作業隊だということは一切言わなかった。我々はそれを信じていたけれども、後でわかったことで、まんまとだまされたわけである。

以上のようにして、この地区の我々を送り出すために約三か月の歳月を要した。その間の労働は強制的なものではなかった。食糧事情は、ソ連側からの配給、我が方で確保していたもののほか、買い出しといって、ソ連側の許可を得て、我が方数人が警備兵つきで近くの町に食物を買い集めにでかける等によって、かろうじて生活を続けたのである。

入ソ時の状況

我々将校千人も出発することとなった。シベリア鉄道を南下して、日本に帰るのだというソ連側の言葉で、十一月三日、牡丹江駅において、三階に改造した旧満鉄貨車にすし詰めに乗車させられた。外から鍵をかけられ、まるで貨物並みの扱いで出発したのである。

十一月の満州の寒さは、我々日本人にとっては実に厳しいものであった。車中には暖房の設備はなく、お互い

の体温と体温のぬくもりで寒さもしのぐなければならなかった。希望はただ帰国することのみであった。ソ連側の言うとおり帰国だろうか、車内での話題はそれのみであった。ソ満国境を通過した。明朝果たしてシベリア鉄道を南下しているだろうか、西に走っているのではなからうか、とにかく昇る朝日で確認しようということになった。

夜が明けてみると、汽車の走る方向はどうしても南下とは思われない。たしかに西の方向であった。あれは虎林だとか虎頭だと言うに至っては、もはや帰国どころではない。このとき、みながいよいよ抑留の覚悟を決めたのだった。さすが鉄のカーテンソ連だ。絶対に漏れなかった。しかし全く信用できないと身にしてみたのだった。

汽車は見渡す限りの雪原を、一直線に西に走る。駅らしい建物はほとんど見られない。停車すれば、車窓から黒パン、土のついた生にんじんを投げ込まれる。それが我々の食糧であった。全く馬並みの扱いである。布切れや服で土を落とし、かじらなければならなかった。生ま

れて初めてのことが体験させられる。たちまちにして下痢患者が出る。便所の設備がなかったから、これはど始末の悪いことはなかった。窮余の末、だれかが所持していた小さな鋸で貨車の床に穴を明けようと、交代交代で根性の穴を開けることができた。みなが本当に喜んだのだった。しかし数日にして発見され、厚い板で完全に塞がれてしまった。

とにかく下痢、風邪の病人は出る、シラミは気ままにわいて刺す、車内はまるで地獄同然の様相を呈していた。他の貨車からは死者が出た模様であった。死体はその都度ホームに引き出されたい。後をどのように処置されたかはだれも知る由もなかった。

バイカル湖畔を走ること約一日、水あり、山あり、トンネルあり、ちやうど紀勢本線を思わせる眺めであった。深い望郷の念にかられた。そのうち汽車はイルクーツクに到着、ここで初めて下車させられた。寒気は厳しいが、のびのびとした気持ちになった。つくづ空氣のうまさも痛感した。下車目的は、被服の熱氣消毒と、体を拭くことであった。シラミに困っていた矢先で、本当に

助かった。用済み後直ちに再び元の貨車に閉じ込められ走り続けた。

東洋の都といわれるノボシビルスクという大きな町に着いた。ここでもイリクーツクと同様、熱氣消毒と体を拭くことができた。どこまで走るかわからないが、給食事情は一向に変わらなかった。

牡丹江を出てから二十四日目、十一月二十七日に白樺茂る森林内の小さな駅に到着した。雪の大変深い所であった。下車し、疲れきった体に防寒衣をつけて、四列縦隊になってとぼとぼと歩くこと二時間、六条の鉄条網を張りめぐらした、そしてソ連兵の警備する収容所らしいところにたどりついたのである。

二十四日間の長い旅を、常にソ連兵の監視下におかれ、不安と飢えと寒さに耐え、病氣とシラミと闘いながら頑張り抜いた、その悲痛な気持ちには、余人には想像もつかないことであらう。

ここはタンボフといって、独ソ戦のとき、ソ連の大兵を集結したという洞窟兵舎を収容所にしたものとか聞かされた。一兵舎は、二百人から三百人の収容能力がある。

地下深く掘ってつくられたもので、昼なお暗い全くの洞窟建物で、これが我々の収容所であった。

この収容所には、日本人将校約一万二千人、独逸人約二千人が収容されていると聞いていた。これからいよいよ抑留生活が始まるのである。

シベリア抑留の追想

和歌山県 野下 善喜

昭和十五年九月、小柄な私は第一乙種現役兵として、各務原第一航空教育隊に入隊し、以後一般教練、特殊教育（写真工手）を終了し、それから四か月、後漢江に駐屯、五七飛行場大隊に属し、中支前線へ参加する。桂林作戦することになっていた。

その後、昭和二十年六月、満州国新立屯飛行場拡張工事に従事。八月十五日、滑走路拡張終了とはほとんど同じころに終戦となり、新民停車場近くで武装解除を受け、その後、奉天の北陵において第四九作業大隊として編成

され、黒河を渡り、十月中旬、ブラゴエチェンスクを通り、十八日間の疲れた長旅の後、クラスノヤルスクの西の小さな駅で下車、用意されたトラックに分乗させられ、標高三百メートルくらいの山を幾つか越えて五十キロほど走ったところでトラックを降り、それからは徒歩行軍となった。

途中、集会所のような所でひと握りの黒パンが支給されたが、疲れのため、そのパンを食べると、だれも一言も語ろうとすることもなく、ごろりと横になって朝まで眠ってしまった。カンボイに起こされて、またまた行軍である。目的地まで十キロほどだという。降雪も激しく、下車駅よりは既に百キロくらい奥地のようだ。

そのうち前方に収容所らしいものが見えてきた。監視兵がそれを指さして、ラーゲルだという。上部は鉄条網を張りめぐらした板囲いのものだ。入り口は衛兵所、四隅の望楼にそれぞれ監視兵が立哨している。大小、十二、三棟のソ連独特の木材建築である。ペーチカの煙突が棟の中央に立っている。雪は既に二メートル近くも降り積もり、樹木もわずかに頭部を出している。ラーゲル